

2005年12月8日(木) 第33回研究会

発表者：相原佳之氏 (東京大学大学院人文社会系研究科博士課程)

発表題目：「18世紀後半、清朝による貴州東南部苗族地域における木材調達について
『採運皇木案牘』の記述をもとにして」

本報告では、中国科学院図書館(北京)所蔵の抄本『採運皇木案牘』につき、史料の概要を紹介し、またそこに描かれた木材交易状況について報告した。

清代中国では、北京の宮殿建築修繕用として中国南方特産の樹種であるコウヨウザンの材木を安定的に調達するため、定められた寸法の丸太を毎年決められた本数だけ南方の四つの省から輸送する制度が整えられていた。木材の調達と輸送は、各省の地方官の中から選抜された採木委員が行っていた。『案牘』には、この制度のもとで乾隆42、46年(1777、1781年)に湖南省の採木委員に任命された英安という人物が、下役たちと共同で行った調達活動の様子が手紙、公文書、手引きの書式で記録される。その後の採木委員は『案牘』をマニュアルとして利用したと考えられる。

英安は、湖南省西部から貴州省東南部で調達を行った。当地域には多くの苗族が居住し、漢族の開発の手が及ぶのが遅く比較的多くの森林が残っており、かつ苗族は人工林生産も開始していた。清代初頭以来、この木材資源の利益を求め、下流から多くの漢族商人が来た。しかし、当地域には自生的な交易慣行があり、漢族商人は地元の苗族商人と直接交渉できず、必ず川沿いの仲介役を通して交渉した。『案牘』には、採木委員の目を通して見た、この特殊な異民族間交易の様子が活写される。

漢民族の文化装置を受け入れた当地の苗族は、山林売買や林業経営関係に関する漢文契約文書を作成し、碑文を立てた。近年、これらが歴史的史料として発見・注目され、研究が進みつつあるが、『案牘』はこの地方史料とも、北京の文書館等に残される档案史料とも異なる性格を持つ史料であり、双方の記述の不足を補う史料として利用可能性が高い。

以上のような背景を持つ『案牘』からは、概ね以下の如き交易状況が抽出できた。採木委員や下役は、定額の本数より多くの木材を購入し、それらを運送過程で販売することで、調達費用の不足を補填し、かつ個人的な利益を得ようとしていたこと。当地域では大径木が稀少になっており、その調達を巡る売買双方・仲介役の駆け引きが活発化しており、その交渉過程では、最終販売先である下流域の木材価格の情報を得ることが有利に働いたこと。採木委員は基本的に当地の交易慣行に従って木材を購入していたが、時には漢族商人や地方官の協力を仰ぎ、地元商人に対して強気な態度で交渉に臨む場合もあったこと。漢族商人は当地の苗族は純度の高い銀を選択的に利用しており、採木委員が持ってきた銀は時に純度が不足し受け取りを拒否される事例もあったこと。などである。

本報告に対して、ベトナムや日本の林業の歴史的状況を踏まえた質疑が幾つか出され、応答・議論が行われた。